制作用企画書

「リアルな空気感」を追求した映像作品

―フィクションとノンフィクションの融合を―

中根　直也

（君塚洋一ゼミ）

はじめに

卒業制作の案を考えたとき，私は最初に媒体を映像にすることを決めた。それは，私が幼い頃からテレビドラマや映画を見るのが好きで，大学で映像の知識を学び，自分でもいくつかの映像作品を制作していた点も大きく関係しているだろう。これまで，旅行の思い出ビデオや友人のライブ映像の編集から，CM やバラエティまで様々な映像制作を行ってきた。そして，その映像を見た人の笑顔や感動した様子を見るたびに，自分も同じように大きな感動を覚え，改めて映像という表現に魅力を感じることになった。

そんな私も，映画というジャンルは未だ経験がなかった。撮りたい作品のビジョンや，表現したいこと，伝えたいことはあったにも関わらず手をつけられずにいたが，大学生活をしめくくる卒業制作という機会を利用し，映画に挑戦してみることにした。なお，本作品が映画と呼べるほどのものになっているかは自分自身も首を傾げるところであり，それはこの映像を見る人の判断に委ねたい。ただ，私はこの作品を映画と呼ぶことを貫きたい。

この映画の制作は全ての作業を二人だけで行っている。映画と聞けば大勢のスタッフや出演者，多くの機材が必要で制作するのが大変というイメージがあるが，映画にも様々な形があり，本当に作りたいと思えばたった二人でも映画を作れることを証明したかったからだ。なお，この映画には私の好みや偏った意見が多く含まれており，見てくれる人にはその点を了解いただきたい。

作品のねらい

映画や，特にテレビドラマを見ていると，あまりにも聞き取りやすく，スラスラとした台詞など，全てが奇麗すぎて違和感を覚えることが多々ある。これらは全て視聴者に分かりやすく情報を伝えるために演出されているものであると考えられるが，私にはそのせいで，台詞や行動がわざとらしく感じられ，登場人物に感情移入できなかったり，良いシーンを見ても心に響かなかったりしてしまう。そこで私は，「リアルな空気感」を追求した映画作品を制作することにした。

「リアルな空気感」とはストーリーの内容に対してではなく，台詞や間に対して創作的なものを感じさせないことである。しかしそれは，全く演出を行わないことではない。キャストの役割や台詞，動きについてある程度の道筋だけは事前に作っておき，後の部分は現場での撮影のなかで作っていくということだ。そうすることで当初の計算では作れない言葉や行動が生まれるのではないか，それを見た視聴者が役者たちのありのままの姿を見ているような感覚をもってもらえるのではないか，と考えた。

「リアル」を追求した映像を作るのであれば，もっともオーソドックスな手段はドキュメンタリーなどのノンフィクションを撮ることだろう。これは私自身も周りからもっとも多く言われた意見でもある。しかし私は，あくまでフィクションにこだわりたかった。それは，自分で構想したストーリーや演出で映像を撮りたいという想いがあったからだ。また，リアル（現実）をフィクション（作り物）において追求する姿勢は一見矛盾す

るようだが，フィクションのなかにリアルを感じさせることで，何でもないような台詞や動きにも深みがでて趣のある映像になる。そして，それによって視聴者にも作品の世界観に入り込ませられると考えているためだ。

「リアルな空気感」とは？

「リアルな空気感」とは一体何だろう。「リアル」も「空気感」もとても曖昧な概念であり，それを言語で表現することは難しい。そこで，今まで見てきた映画のなかで私が求めている「リアルな空気感」を再現していると思われる二つの作品を例に説明していきたい。

まず一つ目の映画は，市川準監督の『buy a suit スーツを買う』である。この作品は，市川準監督が，普段からキャラクターが面白いと思っていた役者としては素人の仕事仲間（CM プロデューサー，CM プランナーなど）に出演を依頼して撮影した自主製作映画である。東京という都会で暮らす生きることに不器用な人々の焦燥感や孤独感と，その中でも繋がりを求める人々の人間模様が淡々と描かれている。役者たちのどこかぎこちない演技にも関わらず，台詞の一つ一つが驚くほど自然で，だからこそ見る者に言葉がストレートに突き刺さってくる。また，全ての会話が関西弁で話されていることが全編にさらにリアリティーをもたらしている。

市川準監督は自身の演出に関して以下のように語っている。

「何か言葉をポンと投げかけたときに，その人の本当のホントが出てきたり，その場がホントの空気になる。」(注1)

「計算から逸脱したものは撮りたいんだけど，自分の意図の枠には入れておきたい。そのあたりの操作が，僕の演出ということなんでしょうね。」(注2)

『buy a suit スーツを買う』でもその考えは生かされており，A4 で 6 ページほどのシナリオと，登場人物のバックボーンを細かく記した副読本を渡しただけで，あとは出演者たちに自由に話させてキャストのキャラクターを活かすという演出を行っている。そのような演出が，俳優たちの自然な演技に繋がったようだ。カメラの距離感も被写体を撮っているというより，登場人物のふるまいや生活を淡々と見つめるという感覚で撮られており，それがなおさらリアリティーを感じさせているように思える。

二つ目の映画は，是枝裕和監督の『ワンダフルライフ』である。この作品は「人が死んでから天国へたどりつくまでの 7 日間というファンタジックな設定の中で，" 人にとって思い出とは何か？ "」(注3) という普遍的なテーマを描いたフィクションである。死んだ後の世界というファンタジックな設定にも関わらず，この作品からは『buy a suit スーツを買う』と似た「リアルな空気」を感じる。特にリアリティーを感じるのが，様々な人物が死者として人生を振り返り大切な思い出を語るというシーンだ。この死者役のほとんどが一般人で，撮影はスタッフがそれぞれビデオカメラを持ち，老人ホームやとオフィス街の公園，大学のキャンパスなど，様々な場所を訪れて行われた。まず多数の一般人に，ひとつだけ思い出を選ぶとしたら，というインタビューを行い，その中から選ばれた 10 人が本人として映画に登場し，実際の思い出を語っているそうだ。

是枝裕和監督はこのシーンについて以下のように語っている。

「映画の前半，思い出を語るシーンには，台詞を語る役者，実体験を話す役者，実体験を話す一般の人など，様々なインタビューが入り混じっています。そして一般の人が語る実話にも，本人の演出や脚色，思い違いがまぎれ込んでいます。そういった記憶の虚と実の間で揺れ動く人の感情を，ドキュメンタリーとして撮りたいと思いました。」(注4)

つまり，この映画は創作のストーリーをなぞりながら，実話のエピソードも盛り込むというフィクションとノンフィクションが融合した作品だといえる。

この二つの映画の演出方法の共通点は，演者が

（注1）（注2）『市川準』P83，85 より一部抜粋
河出書房新社　2009 年
（注3）（注4）「ワンダフルライフ公式サイト」より一部抜粋　http://www.kore-eda.com/w-life/

台本の文字をそのまま話すのではなく，登場人物の心情を考え，それを演じる役者がその瞬間，瞬間のなかで台詞や行動を選んで演技を行っていることだ。映画監督には，細かい部分まで入念に指示をして役者を駒のように扱うタイプと，ある程度の設定だけ指示して後は演者の自由にさせるタイプの２種類がいるが，この二人の監督は明らかに後者である。

日常生活では，よほどのことがない限り会話の内容をあらかじめ決めてそれをなぞるように話す人などいないだろう。もしそのような場面があったとしても，相手の返答が自分の想定していたものと違うことだって当然ありえる。私たちは普段，相手の返答やリアクション，状況などを考慮して，その瞬間，瞬間に台詞や行動を選んで言動を行っているのだ。そして，この二人の監督はそうした状態を意図的に作ることによって「リアルな空気感」を生み出しているといえよう。つまり「リアルな空気感」とは，台詞のミスや詰まり，独特の間などそれぞれの瞬間に，監督や俳優の意図としてではなく，偶発的に起こる出来事によって作られるものだと考えられる。

撮影の手順

では，今回私がとった撮影手順について説明していく。

①出演者に台本を覚えてもらい，役作りについて入念に話し合う

出演者に，まず自分のキャラクター（役柄）だけは徹底的に理解してもらった。台詞を大まかに覚えてもらい，状況やそのときの登場人物の心理を考えて話すようにさせた。方言やなまりもそのままで話してもらうように説明した。また，監督である私と，その役を演じる出演者との間で登場人物のイメージを入念に話し合い一致させるようにした。

②リハーサル

ストーリーの流れや役者の動きの確認をした。この際にも，登場人物に対するイメージの確認を行い，あまりにも自分のイメージとかけ離れている所は変更するよう出演者に要望を出した。逆に出演者がリハーサルで実際に演じてみて，台詞などに違和感がある場合も変更を行った。

③本番

ほとんどのシーンを，舞台となる室内でビデオカメラを３カ所に固定し撮影を行った。固定して撮影したのは，物が多くて狭い閉鎖的な空間での撮影となったため，手持ち撮影が困難だったことと，演者たちに動きの制限なくできるだけ自由に演技をしてもらいたかったためだ。本番はよほどのことがない限りカットはしないようにした。それは，そこで偶発的に起こる台詞のミスや詰まり，独特の間によってこの作品がめざす「リアルな空気感」を生みだしたいと考えたからである。

あらすじ

やりたいことも見つからないまま就職活動を行っていることに悩んでいる，ごくごく普通の学生である田中くん。ある朝田中くんが目覚めると，知らない男が自分の部屋で食事をしながらテレビを見ている。しかも，その男は自分が天使だと名乗る。

天使を名乗る男の名前は斉藤さん。初めは斉藤さんの言うことを全く信じていない田中くんだったが，突然目の前に現れたり，消えたりするさまを見て次第に斉藤さんが天使であることを信じるようになる。しかし，斉藤さんは天使であるにも関わらず，魔法も秘密道具も出せない。本当に何も出来ない驚くほどのポンコツだった。そんな斉藤さんに説教されたり，一緒に遊んだり，喧嘩したりしながら田中くんとの間に絆（？）が生まれる。悩んでばっかりでダメ男の田中くんと，何も出来ないのに口ばっかり偉そうなダメ天使の斉藤さんのダメダメなコンビが贈るコメディ映画。

登場人物構成

田中くん

大学４回生。やりたいことが特にないにも関わらず，周りに流されて就職活動を行っている。そして，そのことに悩んでいる。高校時代のある出来事から，軽い人間不信に陥る。お人好し。甘い

物好き。

田中くんは，誰もが悩みそうなことに悩み，下らないことで馬鹿みたいに怒る。そんな，どこにでも居そうな学生をイメージした。

斉藤さん

田中くんに家に突然現れた天使。マイペースで自己中心的。言うことがいちいち胡散臭い。田中くんを幸せにするために来たというが特別なことは何もしない。

突然，人間ではないキャラクターが現れ，ダメな主人公を改善していくという設定は，ドラえもんを筆頭に漫画，映画，ドラマなどのフィクションの世界では王道中の王道だが，この作品に出てくる斉藤さんは，天使であるのに魔法も何も使えないポンコツ。でも，天使なのに人間臭くて，天使だから人間を客観的に見ていて時々真理を突く発言をする。

挿入曲

この映像の挿入曲には，著作権フリーの無料音楽ダウンロードサイトから，『時間は動き出す（ループ）』(注5)，『夕暮れの街角で』(注6)を使用した。

クレジット

タイトル

「田中くんと斉藤さん」 21 分　カラー

監督　脚本　編集

中根直也（メディア社会学科 4 回生）

出演

田中くん / 中根直也

斉藤さん / 津村朝光（メディア社会学科 4 回生）

撮影

中根直也，津村朝光

協力

京都学園大学人間文化学部メディア社会学科

君塚洋一ゼミのメンバー

撮影場所

京都府亀岡市　セントラル・ルミナー（中根直也のマンションの一室）

（注５）（注６）Music –Note.jp　http://www.music-note.jp/ より

反省・課題

反省点は挙げればきりがないほどあるが，この作品は「リアルな空気感」の追求という，いわば演出面に対して重点を置いているため，今回はその点に対してのみコメントしたい。

まず，斉藤さん役を演じてもらった津村朝光さんに関して言えば，私が描いた斉藤さんというキャラクターをしっかりと把握したうえで，自分なりのイメージもそこに上手く足して演じてくれた。さらに，台本をなぞりながらもアドリブや独特の間を入れて，私が言う演出を理解し実行してくれたことには非常に感謝している。

それに対して，田中くん役の私（監督であり，主演）の演技は一言で言うと軽すぎた。これは田中くんというキャラクターが，どこにでもいる普通の学生という役柄だったこともあるが，言葉の一つ一つがあまりにも軽いものになっていると感じた。もっとテンポや間を意識するべきだったのではないか。具体的には，就職活動に対して斉藤さんに愚痴をいうシーンの演技が台詞的になりすぎた箇所などである。しかし，その一方で斉藤さんに対する一つ一つのリアクションは自然だったと思っている。それは，意図的に発せられたものではなく，現場のなかで生まれた台詞や行動に対する生の反応を撮れたからだ。

最後に，今回の『田中君と斉藤さん』は閉鎖的な空間で，二人だけのキャストで撮影したが，次回は逆に開放的な空間で複数のキャストをつかって作品を撮りたいと考えている。

協力者への感謝

この作品の制作するにあたり，多くの方々にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

『市川準』河出書房新社　2009 年

buy a suit スーツを買う

http://ichikawa-jun.com/sp/buy.html

ワンダフルライフ公式サイト

http://www.kore-eda.com/w-life/

各シーンの内容・補足・エピソードなど

起きると知らない男が

「おはよう、田中くん」

タイトルコール

シーン１

朝、目を覚ますと知らない男が自分の家で朝食を食べている。田中くんが起きたことに気づくと、焦りもせず何食わぬ顔で話しかけてくる男。男の余りの自然さに、もしかしたら自分が忘れているだけで男は知り合いなのではないかと必死に考える。しかし、全く思い出せずに男に何者かを尋ねる。男は斉藤と名乗り、「田中くんも朝ご飯食べる？」と当たり前の表情で聞いてくる。目覚めてすぐのことだったので混乱していた田中くんだったが、段々と知らない男が自分の家に無断で侵入し、朝ごはんを勝手に食べているという異常な事態に気付く。急いで追い出そうとするが、男はそれを拒む。警察を呼ぶと脅すと、男は「自分は天使で、田中くんを幸せにしに来た」と言う。いよいよ目の前の男が危ない人だと思った田中くんは警察を呼ぶために携帯電話を探す。ベッドに置いてある携帯を拾い振り返ると、男が消えている。部屋を探すが男の姿はやはりない。

・田中くんと斉藤さんの出会いのシーン
・朝食はお茶漬け、味噌汁を実際に作った
・逆光で顔が見づらくなっている個所があるが、これはなるべく自然体の風景をそのまま切り取りたいと考えたため、あえてそのまま撮影した
・オープニング曲『夕暮れの街角で』からのタイトルコール

テレビを見ている田中くん

突然、男が現れる

シーン２

斉藤と名乗る男が現れた次の日。昨日の出来事を不可解に思いながら、夢だと自分に言い聞かせ普段通りの生活をする田中くん。お菓子を食べながらテレビを見ていると、昨日の男が突然目の前に現れる。驚く田中くんをよそにまたも男は、自分は天使で田中くんを幸せにするために来た、と話す。当然男の言うことなど信じられない田中くんは追い出そうとするが、男は頑なにそれを拒む。しかも、男は天使と言っても特別なことは何も出来ず、出来ることは田中くんの悩みを聞いたりアドバイスしたりすることだけだった。口論していると男は昨日と同じように突然消えた。いよいよ男が普通の人間ではないことを認めるしかない田中くんだった。

・斉藤さんが本物の天使だと田中くんが認識するシーン。また、斉藤さんのダメさ加減を同時に印象付けるシーンでもある
・途中、ぬいぐるみが映るのは斉藤さんを消すため

ゲームをしている二人

ご飯を食べている二人

シーン３

毎日のように田中家にやってくる男。二人は互いを「田中くん」「斉藤さん」と呼び合うようになっていた。

一緒にゲームをしたり、食事をしたりしながら取り留めのない話ばかりをしている二人。斉藤さんがする話は胡散臭いものばかりだったが、田中くんはそれを笑いながら聞いていた。

・二人の距離感が縮まるシーン
・特別なことは全く起きない
・途中、田中くんが飲み物をこぼすシーンがある。これは意図してやったものではなかったが、逆にリアルな感じを出せると考えそのまま撮影を続行した

就職活動から帰って来た田中くん

斉藤さんに愚痴を言う田中くん

プリンを食べられて激昂する田中くん

シーン４

就職活動から帰って来ると家には当たり前のように斉藤さんがいて、漫画を読んでくつろいでいる。そんな奇妙な状況にも慣れ始めた田中くん。しかし、田中くんは特にやりたいこともないのに就職活動をしていることに悩んでいた。そして、思わず斉藤さんに愚痴を言ってしまう。斉藤さんは田中くんに厳しくも温かい言葉をかける。「斉藤さんが言っても説得力が無い」と言いながらも少し前向きな気持ちになれた田中くん。

しかし、そんな二人にまさかの事態が訪れる。田中くんが楽しみに取っておいたプリンを、斉藤さんが食べてしまったのだ。激昂する田中くん。初めこそ謝っていた斉藤さんだったが、あまりにしつこく怒る田中くんに次第に怒りを見せ始める。そしてついに、斉藤さんは田中くんの家を追い出される。それでも収まらない田中くんの怒り。二人はどうなってしまうのか。

・田中くんと斉藤さんが喧嘩をするシーン
・就職活動ということで田中くんはスーツ着用
・斉藤さんの「後悔する人間っていうのはどの道を選んでも後悔する」「正しい道を選ぶより、選んだ道を正しくする」という言葉は私が実際心がけている言葉でもある
・たかがプリンを食べられたことに本気で怒るという、器の小ささや不器用な全力さが、私がイメージする田中くんにぴったりと思いこのシーンを撮った

語り合う二人

顔のない高校生たち

人間の魅力って何？

斉藤さんの置手紙

おしまい

シーン５

一週間斉藤さんは、田中くんに姿を見せなかった。家に帰ると今日も斉藤さんがいないことに少し寂しさを感じる田中くん。テレビを見ながら、お菓子を食べていると斉藤さんが突然現れる。少し気まずい二人。斉藤さんがプリンを食べたことを謝ると、田中くんも少し言い過ぎたと謝る。これで今までどおりに戻る、と田中くんは思った。しかし、斉藤さんは「今日限りで田中くんに会えなくなった。今生の別れになる。」と言う。衝撃の発言を受けショックを隠しきれない田中くん。と思いきや、よく考えればそれほど斉藤さんとの思い出もなく、そもそも「田中くんを幸せにしに来た」と言われたのに何もしてもらってないことを思い出し、意外と冷静な田中くんだった。

最後の思い出にお酒を飲む二人。その中で、田中くんは高校時代のある出来事について語りだす。

気が付いたら寝てしまっていた田中くん。目を覚ますと斉藤さんの姿はもうなく、手紙だけが残されていた。手紙には「田中くん？幸せか？」と書かれている。田中くんは、昨日斉藤さんに言われたことを思い出す。手紙を丸め立ちあがる。その眼には何らかの決意が現れているようだ。田中くんは心の中で「斉藤さん、ありがとう」とつぶやく。その時、トイレから水を流す音が聞こえてくる。固まる、田中くん。当たり前のように、斉藤さんがドアから出てくる。「帰れよ！」田中くんは叫ばずにはいられなかった。

・ほとんどのシーンを、二人を見つめているように撮ってきたが、このシーンだけは二人の言葉や表情に注目してほしかったのでバストショットのアップで撮った
・田中くんが語る高校時代の出来事は、私が実際に高校時代に体験した出来事である。私は田中くんのように人間不信には陥らなかったが、様々なことを考えさせる出来事だった。
・斉藤さんが語った、「人間の魅力」については斉藤さん役の津村朝光さんの完全なアドリブで、人間を客観的に見ている斉藤さんの真理を突いた発言だと思い採用させてもらった
・田中くんの「帰れよ！」からのエンディングロール
・おしまい